原典・古典の紹介

Lafcadio Hearn(ラフカディオ・ハーン)の Kwaidan(怪談)と神経内科疾患* (その1)

古　谷　博　和**

はじめに

近年の脳神経科学研究の進歩に伴い，以前は純粋に精神科領域の症状と考えられていた、幻覚妄想などの症状も、Parkinson病、Parkinson症候群、Alzheimer病など神経変性疾患の患者さんにみられる場合などは、神経内科でも日常の外来診療で扱うようになってきた．それに伴い、これまで単なる錯覚や患者さんの創作ではないかと考えられてきた症状や徴候が、神経学的に検討すると、正常人に認められる軽度の高次脳機能障害の一部である可能性が出てくるなど，精神科領域と神経内科領域との境界がはっきりしなくなってきている[1]．

そこで、誰もが幼少時期に一度は読んだり聞いたりするものの、これまで単なる不思議な怪談噺と扱われる事の多かった、小泉八雲(Lafcadio Hearn, ラフカディオ・ハーン)の「怪談(Kwaidan)」について、神経内科医の立場から再度考察を行ってみる事にした．

図1．小泉八雲(Lafcadio Hearn, ラフカディオ・ハーン)の肖像画[2]

小泉八雲の生涯

小泉八雲(Lafcadio Hearn)(図1)はアイルランド人の軍医の父親と、ギリシャ人の母親のもとに、1850年ギリシャで生まれたが、ハーンが4歳の時に両親は離婚することになった．ハーンの母は少年の元を去り、父は再婚してインドへ去ったため、両親に見捨てられたハーンは金持ちの大叔母に引き取られて暮らす事になる．しかし、神学校に通ったハーンは、16歳の時、事故のために左目を失明．更に悪い事には大叔母が破産したために、19歳でアメリカに渡って種々の職業を体験した後、新聞記者として働くことになった．

1877年、27歳の時にミシシッピー州、ニューオリンズの新聞社「デーリーアイテム」に入社．1884年、34歳の時にニューオリンズ百年祭の日本館を見て、日本の事に興味を持つようになり、1890年、40歳の時に日本取材の仕事で日本に

* Tales of “Kwaidan” by Lafcadio Hearn and Neurological disorders(1). (Accepted January 31, 2006)
**Hirokazu FURUYA, M.D., Ph.D.:国立病院機構大牟田病院神経・筋センター神経内科〔〒837-0911福岡県大牟田市大字橘1044-1〕;Department of Neurology, Neuro-Muscular Centre, National Omuta Hospital, Fukuoka 837-0911, Japan

来航. 本社と契約の事でトラブルもあったため、ニューオリンズで知り合った服部一三の斡旋で、出雲松江中学の英語教師となる. 松江滞在中の一年二ヶ月の間に中学教頭　西田千太郎のすすめで、松江の士族小泉湊の次女　小泉節子(セツ)と結婚. その後、熊本、神戸、そして東京と住まいを移し、第五高等学校(現・熊本大学教養部)、東京帝国大学、早稲田大学などで英文学を教える事となった. 1896年、46歳の時に日本へ帰化、以後「小泉八雲」と名乗るようになり、1904年、54歳で心臓病（おそらく心筋梗塞）のために帰らぬ人となっている. 代表作として、「骨董(Kotto)」、「神国(Japan)」、「怪談(Kwaidan)」などがある[2].

小泉八雲と怪談(Kwaidan)について

両親との縁の浅い、不幸な幼少時期を送った八雲は、少年期から良く鮮明な幻覚や奇怪な夢を見る事が多かったようで、このような体験が後の八雲の作品の基盤となったものと考えられる. 1880年の8月に松江に赴任した八雲は、松江周辺の美しい自然と古い日本の面影に強く心を引かれ、さらにこの地方で伝承されていた種々の民話に興味を示すようになった. 八雲が書き記した民話や怪奇譚については、引用譚以外は妻のセツが覚えていたものや、八雲一家がその後移り住んだ地方の住民から、彼女が聞いたものを八雲に語ったものが殆どで、八雲の松江滞在は短いものながら、彼の作品には旧城下町の松江や熊本の風情・情緒が大きく影響していると考えられる.

その後八雲は北部九州、隠岐、奈良、京都などを訪問した後、1984年、44歳の時の「日本瞥見記(Glimpses of unfamiliar Japan)」を皮切りに、日本に関する著書を多く書き記す事になった. 八雲は早くから日本の民話、伝説をその著書の中に記載しているが、1899年の著作「霊の日本(In ghostly Japan)」の頃から、作品の中に聞き記した怪談・奇談を掲載するようになった. その後、「影(Shadowings)(1900年)」、「日本雑録(A Japanese miscellany)(1901年)」、「骨董(Kotto)(1902年)」等の中に多くの怪談・奇談が掲載されており、それらの集大成である「怪談(Kwaidan)(1904年)」は、八雲としては最晩年の作品といえる[2].

八雲の著作は「十訓抄」、「今昔物語」、「雨月物語」、「新著聞集」など、日本の有名な古典からの再話、一部翻案のものもあるが、岡倉天心、松江での愛弟子である大谷正信、松江中学の西田千太郎教頭を初めとして、各地の寺の住職、城下の若者など様々の人々からの聞き書きを素材にしたものも多く、民俗学的に見ても重要な資料になっており、決してただの翻案・再話集や、創作集というわけではない[2].

以下、八雲の「怪談(Kwaidan)」の中から4作品を素材として、それぞれの怪談噺を神経学的に検討してみる事にする.

ろくろ首(轆轤首)(Rokuro-Kubi)

この話自体は、南北朝時代、南朝方として戦った熊本の菊池一族が、北朝勢力により滅ぼされた後、その重臣であった磯谷平太左衛門が出家して「開良」と名乗り、諸国行脚の途中、甲斐の国で出会った怪異に関して記載されたものであるが、八雲の数々の作品の中でも、読んでみてその題名と内容との間に違和感を感じる事が多い作品である.

Very gently he pushed apart the sliding-screens that separated his room from the main apartment; and he saw, by the light of the lantern, five recumbent bodies -- without heads! For one instant he stood bewildered,-- imagining a crime. But in another moment he perceived that there was no blood, and that the headless necks did not look as if they had been cut. Then he thought to himself: --"Either this is an illusion made by goblins, or I have been lured into the dwelling of a RokuroKubi. . . .”

(彼はゆっくりと客間と居間を隔てている衝立を動かした. そして行灯の光の下に、首のない五体の体が横たわっているのを見つけた. 一瞬彼は、何かの犯罪が起こったことを想像して当惑したが、すぐに血が流れておらず、頭のない首の部分が、切断されたように見えないことに気がついた. 開良は「これは鬼が見せたただ

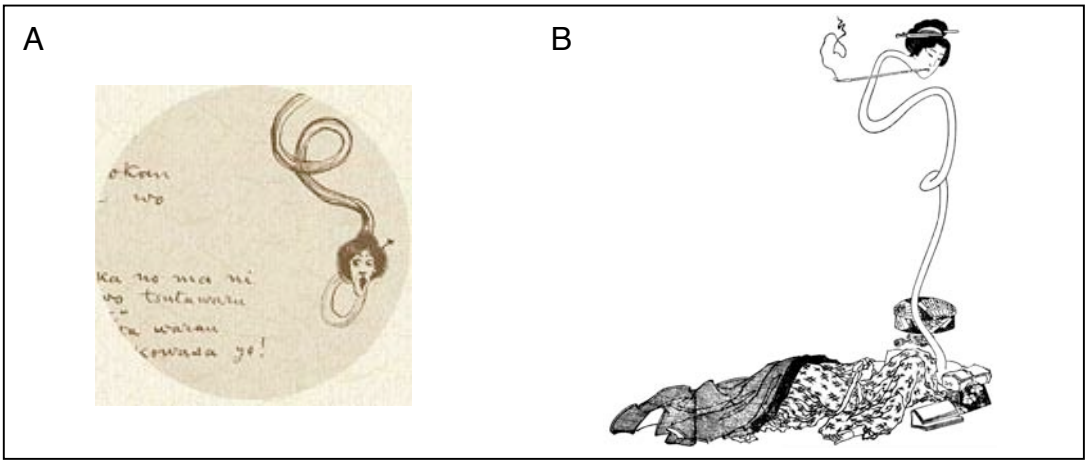

図2. A. 小泉八雲が自分で描いた「ろくろ首」のイラスト [2], B. 葛飾北斎の描いた「ろくろ首」（「北斎漫画」[19]より）

のあやかしか、ろくろ首の巣窟に誘い込まれてしまったかに違いない」と考えた.)

He heard voices talking in the grove; and he went in the direction of the voices, -- stealing from shadow to shadow, until he reached a good hiding-place. Then, from behind a trunk, he caught sight of the heads, -- all five of them, -- flitting about, and chatting as they flitted.

(木立の中で人の話し声が聞こえたので、開良は都合良く姿を隠してくれる樹木の影を伝いながらその方向に行ってみた. そうして、木の幹の陰から、例の五人の首が飛び回り、飛びながら話をしている様子をじっと見ていた.)

私達が日本昔話などで慣れ親しんだ「ろくろ首」は、胴体から首が長く伸びたもので(図 2A, B)、「ろくろ」は、陶芸に用いる旋盤の「轆轤」、もしくは傘の開きの部分を指し、いずれにしても伸縮自在という意味であるので、八雲が記載した飛遊する首という妖怪は、どちらかと言えば「抜け首」とも言うべきである. 首が伸びる妖怪というのは日本独特のものである事、中国には飛遊する首という怪談のある事、八雲は日本に来る前の1887年に、アメリカで「支那怪談」という本を出版している事などから[2]、「怪談(Kwaidan)」の中のこの噺に関しては、八雲が中国の怪談を日本向けに翻案したと考える研究者もいるほどである.

しかし江戸時代に書かれた随筆をみてみると、例えば平戸藩主である松浦静山の著作である「甲子夜話」には、下女の首が夜半に飛遊しているのを見たと言う人の話が記載されており[3]、あるいはある下女の首が、深夜屏風の横の部分を上がり下がりしているのを見て、さてはこの女は「ろくろ首」だということがわかってひどく驚き、翌日その事を問いつめると、自分には首が伸びる病があるという事を白状したという話がある[4]. 前者の場合、(まるで冬場の吐息のように)首が飛んでいく軌跡に見える煙のようなものが、首が伸びたように見えたのではないかと記載されているし、後者の場合は首が飛遊していたのか、伸びていたのかは屏風に隠れていてはっきりしていない. しかしこれらの話から考えると、江戸時代に「ろくろ首」と言えば、ごく自然にこの両者を指していたようで、明治時代にこの話を採取した八雲の記録が、あながち誤っているとか、創作や翻案であるなどとは考えにくいのではないだろうか.

それでは首が伸びたり、飛遊するという話を全くの作り話と考えず、一つの神経学的な徴候と考えると、どのような病態が考えられるだろうか. 首が伸びる、あるいは伸びたような感じがするという症状で最も有名なものに「片頭痛」の

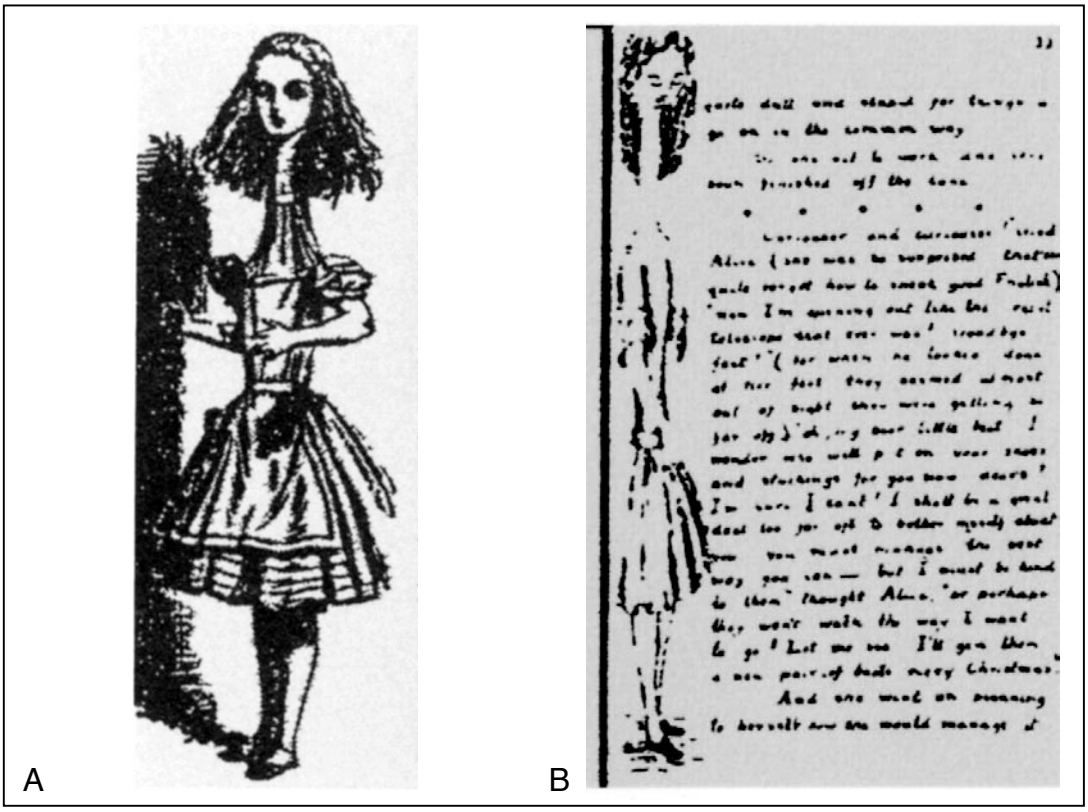

図3. A.「不思議の国のアリス」(1865 年初版)に描かれた Tenniel の挿絵 [5], B. ルイス・キャロルがアリスのモデルである Alice Liddell のために作った、最初の手書きの本(1864 年)に描かれた挿絵 [5]。いずれも首が長く伸びたアリスの絵が描かれている。

体感幻覚がある. 前兆を伴う片頭痛では閃輝暗点などの視覚異常が最も多いが、軽度の体感幻覚などの症状が認められる事もあり、片頭痛に合併する頭頂葉症候群の一つと考えられている.

文学作品に現れた片頭痛の体感幻覚の最も有名な例として、ルイス・キャロルの「不思議の国のアリス」がある. ルイス・キャロルの家系には片頭痛があったようで、彼自身も後にひどい片頭痛に悩まされる事になった[5]. おそらく彼は家族のひどい片頭痛の症状を思い出し、作品の中に取り入れたと思われるが、彼自身が書いたその初稿の挿絵や自筆の挿絵には「ろくろ首」のように明らかに首が伸びた「アリス」の図がある (図 3A, B).

'Now I'm opening out like the largest telescope that ever was! Good-bye, feet!' (for when she looked down at her feet, they seemed to be almost out of sight, they were getting so far off).

'Oh, my poor little feet, I wonder who will put on your shoes and stockings for you now dears?'

(アリスが自分の足を見てみると、足はどんどん離れてゆき、まるで視界の果てに行ってしまいそうに見えました. 「どうしましょう. 私の体はとっても大きな望遠鏡みたいになっちゃった. バイバイ、私の足さん. 」と、アリスは言いました. 「可哀想な小さな私の足さん. いったい誰があなたに靴下や靴を履かせてくれるのかしら. 」)
(『不思議の国のアリス』[5])

これを読むと、アリス自身がまるで「ろくろ首」になったような、首の伸び縮みする異常な感覚を体験したことがわかる (図 3A, B). ただ日本人の場合、体感幻覚を伴う片頭痛症例は極めて少なく、筆者も片頭痛の患者さんはこれまでに100例以上診察していると思われるが、2例ほどしか経験していない. しかしながら、江戸時代に妖怪として記載されている「ろくろ首」は、その殆どが女性で、普段は通常の人と何ら変わりがないものの、首が伸びる病気を持っていて、夜間になると首が伸びるというように設定されている場合が多い[3)4)]. これは後述する「のっぺら坊」、「一つ目小僧」などの、通常の妖怪とやや異なっており、この事からも「ろくろ首」が当時きわめて頻度が少ないながらも、片頭痛の体感幻覚がそのモデルになっている可能性を示唆している.

それでは次に、小泉八雲が「ろくろ首」の中で記載した「飛遊する首」を見るという状況は、どのような神経学的症状と考えられるだろうか. これについては次の「食人鬼(Jiki-jin-ki)」の所で述べることにする.

次号で、彼が書いた3作品(食人鬼、耳なし芳一、むじな)のそれぞれの怪談噺を神経学的に検討してみたい.

文　献

1) Furuya H, Ikezoe K, Ohyagi Y *et al*. A case of progressive posterior cortical atrophy (PCA) with vivid hallucination: are some ghost tales vivid hallucinations in normal people? *J Neurol Neurosurg Psychiatry* 2006; *in press*.
2) 上野義和. 二人の偉大な日本紹介者 ハーンとモラエス. ラフカディオ・ハーン没後100年並びにヴェンセスラウ・デ・モラエス生誕150年 展示目録. 京都:京都外国語大学付属図書館; 2004. p. 6-24.
3) 松浦静山. 甲子夜話 1. 中村幸彦、中野三敏・校訂. 初版. 東洋文庫, 東京:平凡社; 1977. p.132-3.
4) 今野圓輔. 日本怪談集 妖怪篇. 現代教養文庫、東京:社会思想社; 1981. p. 86-97.
5) 豊倉康夫. 7章 不思議の国のアリス. 芸術と文学に見られる神経学的作品. 初版. 東京:ノバルティスファーマ; 2003. p. 30-3.

＊　＊　＊

神経内科, 64(4) : 429-434, 2006

原典・古典の紹介

Lafcadio Hearn(ラフカディオ・ハーン)の Kwaidan(怪談)と神経内科疾患* (その 2)

古 谷 博 和**

食人鬼(Jiki-jin-ki)

「食人鬼」は餓鬼についての怪談で、夢想国師が旅の途中に立ち寄った小さな村で、通夜を行うことになった時に体験した奇怪な体験について、以下のように記載されている.

But, when the hush of the night was at its deepest, there noiselessly entered a Shape, vague and vast; and in the same moment Muso found himself without power to move or speak. He saw that Shape lift the corpse, as with hands, and devour it, more quickly than a cat devours a rat, -- beginning at the head, and eating everything: the hair and the bones and even the shroud. And the monstrous Thing, having thus consumed the body, turned to the offerings, and ate them also. Then it went away, as mysteriously as it had come.

（しかし、夜の静寂がその極みに達した時、大きな、淡い影のようなものが音もなく入ってきた. それと同時に「夢想」は体中の力が抜けてしまい、動くことも、しゃべる事も出来なくなっている事に気がついた. 彼は、その影が手で亡骸を持ち上げ、猫が鼠を食らうよりも速く、頭から始まり頭髪や骨、経帷子までも、全てのものをガツガツとむさぼり食うのを見た. 亡骸を食べ終わると、今度はそのあやかしは、供物の方に向かい、それをまた食い尽くした. そうして全てのものを食べ尽くすと、その奇怪なものは入ってきた時のように、また出て行ってしまった.）

この現象については、精神科医の中村希明氏がその著書の中で興味深い説を記載しておられる[6]. 前後の因縁噺の記載から切り離してこの部分だけを見てみると、長い旅の疲れの後、遺体の横で読経を行い、瞑想に入った「夢想」に、ナルコレプシーの患者に見られるような入眠時幻覚(hypnagogic hallucination)が起こったことが考えられる. 下線で示した部分は、まさに金縛り体験が起こったことを示しており、この体験と同時に夢想が見た怪異は、入眠時幻覚による可能性が充分考えられる.

入眠時幻覚自体はナルコレプシーに特有の現象ではなく、正常者にも起こる現象で、この時同時に金縛り現象を伴うことが多く、特に金縛りの最中に視覚性、触覚性、聴覚性の幻覚を経験する人が若年正常人の約0.3%程度に認められる[7]. この頻度は、インターネットを通じてカナダ オンタリオ大学で行われた聞き取り調査でもほぼ同様である[8)9)]. 正常人の体験するこのような入眠時幻覚は怪奇譚の題材になることが多く、作家の故・遠藤周作氏も、若い頃ある旅館で体験した入眠時幻覚の事をエッセーに記しており、さらにこの体験をもとにしていくつかの怪奇小説を書いておられる[7]. 正常人の経験する入眠時幻覚でも、ナルコレプシーの患者さんのそれと同様に、睡眠と幻覚およびそれからの覚醒の間では記憶のとぎれがないので、体験した幻覚があたかも実際に起こった現象のように感じられるという特徴がある. 幻覚の内

* Tales of "Kwaidan" by Lafcadio Hearn and Neurological disorders(2). (Accepted January 31, 2006)
**Hirokazu FURUYA, M.D., Ph.D.:国立病院機構大牟田病院神経・筋センター神経内科〔〒837-0911福岡県大牟田市大字橘1044-1〕;Department of Neurology, Neuro-Muscular Centre, National Omuta Hospital, Fukuoka 837-0911, Japan

容には、浮遊体験、離人体験のようなものの他、恐怖感を伴うものも多く、特に体の上に魔物のようなものがのしかかってくるという、恐怖感を伴った体感幻覚を伴う頻度が最も多いとされている[8)9)].

入眠時の視覚性幻覚の中には「浮遊する首」、「浮遊する上半身」などというものもあり[6)]、筆者がかって診ていたナルコレプシーの患者さんにも、何度か「浮遊する首」という視覚性幻覚を経験された方がいて、初めてそのような幻覚を体験した時にはびっくりしたものの、数多く体験するうちに慣れてしまい、しまいにはその「首」と会話までするようになったという経験を語ってくれた. 江戸時代から明治時代の初期まで斬首、晒し首という刑罰が良く行われており(最後にこの刑罰が行われたのは、1874年(明治7年)の「佐賀の乱」での江藤新平の処刑)、小泉八雲の時代の日本人は「生首」というものに接した経験も多く、必然的に「浮遊する首」という幻覚を入眠時幻覚として体験した正常人が多かったため、「ろくろ首」のような話が一般に受け入れられていたとして不思議はないだろう.

日本ばかりでなく世界各地で朦朧とした風貌で現れ、語りかけたり、触ってくる幽霊譚が長らく語り継がれてきた背景には、正常人1000人に3人程度(0.3%)という、決して多くはないが極めて稀という訳でもない頻度で経験される入眠時幻覚、特に視覚性、聴覚性、触覚性の幻覚が、大きな役割を果たしているのではないだろうか. 特に日本の場合、夏場に怪談が多く語られるのも、空調設備などの無かった昔、高温、多湿のために充分な睡眠のとれなかった人々に、冬場より高い頻度で入眠時幻覚が生じたためではないかと考えると、説明可能になる.

耳無し芳一(The Story of Mimi-Nashi-Hoichi)

「耳無し芳一」には、芳一という盲目の琵琶法師が遭遇した平家の落ち武者の亡霊と、それから両耳を奪われるという恐怖体験が綴られている. ただ、この話を注意して読んでみると、これらの亡霊に関する記載は、全て芳一の聴覚性の幻覚に基づいていることがわかる.

Then came sounds of feet hurrying, and screens sliding, and rain-doors opening, and voices of women in converse. By the language of the women HoIchi knew them to be domestics in some noble household; but he could not imagine to what place he had been conducted.

(それから急ぎ足の足音が聞こえ、扉が引き開けられて雨戸の開く音、女中の話し声などが聞こえた. 女中の言葉遣いから、芳一は高貴なお屋敷の中に居ることがわかったが、一体どこの屋敷に案内されたのかはさっぱりわからなかった.)

There he thought that many great people were assembled: the sound of the rustling of silk was like the sound of leaves in a forest. He heard also a great humming of voices, -- talking in undertones; and the speech was the speech of courts.

(その席には衣擦れの音がまるで森の中での木の葉のざわめきのように聞こえたので、多くの高貴な人々が集まっている事がわかった. 芳一にはまた、宮廷での会話のような、低い声でのざわつきの声も聞こえた.)

At last, as they were returning to the temple by way of the shore, they were startled by the sound of a biwa, furiously played, in the cemetery of the Amidaji. Except for some ghostly fires -- such as usually flitted there on dark nights -- all was blackness in that direction. But the men at once hastened to the cemetery; and there, by the help of their lanterns, they discovered HoIchi,--sitting alone in the rain before the memorial tomb of Antoku Tenno, making his biwa resound, and loudly chanting the chant of the battle of Dan-no-ura.

(結局、寺男達は浜辺沿いの寺への道を戻ってきたが、その途中阿弥陀寺の墓地で激しくかき鳴らされる琵琶の音を聞いて仰天した. 闇夜の晩にいつも、いくつか飛びかう鬼火の他には、あかりと呼べるものはいっさいない漆喰の闇の中からであった. しかし、寺男達はすぐさま墓地

の方に急ぎ、提灯の灯りで、芳一がたった一人、雨の中、安徳天皇の墓碑の前で彼の琵琶をかき鳴らし、壇ノ浦の戦いの章を朗詠しているのを見つけ出した.)

前述の中村希明氏は、その著書の中で「耳なし芳一の話」も取り上げており、その話は芳一の潜在意識にある虚栄心、名誉欲が作り上げた幻聴ではないかと考察している[6]. 精神病理学的に考えるとそのような要素も考えられるかもしれないが、神経内科医の立場から考えると、注目すべき点としては、芳一がおそらく幼少時期、年齢的に早い時期から失明している点がある.

後天的な失明者や弱視者がありありとした幻視を体験することは、Charles Bonnet症候群(CBS)として眼科領域ではよく知られている現象である[10]. CBSはもともと、後天的失明者、あるいは弱視者が体験するありありとした幻視で、この現象に関しては、近年機能MRIや脳血流SPECT、PET等を用いた研究がなされている[10)11]. その結果、CBSを体験中の被験者では、後頭葉だけでなく、頭頂葉、扁桃体を含む側頭葉の一部の活動性が高まっており、これが鮮明な幻視体験と関連しているという説が有力になってきている[10)11]. また、びまん性Lewy小体病(DLBD)や、Alzheimer病の一部、鮮明な幻視を伴うParkinson症候群などでも同様の所見が見られることから、CBSと、DLBLの幻視の共通性についても議論されている[1)10)11].

残念ながら先天性視覚障害者における大脳皮質における機能的分布がどのようになっているか、あるいは先天性視覚障害と統合失調症の合併者の幻聴、錯聴体験時の脳機能についての詳細な検討はこれまでになされておらず、CBS患者がありありとした幻視を体験するのと同じような機序で、先天性視覚障害者が幻聴を体験するかどうかは、はっきりしていない. その一方で、精神科や眼科の分野から、先天性視覚障害者は訂正可能な幻聴を体験する頻度が経験的に多く[12]、また先天的に失明させた実験動物の場合、大脳皮質の機能マッピングを行うと、聴覚野が視覚野にまで広がっているという報告があったり[13)14]、Parkinson病で幻覚を見る人と見ない人との間で、視覚刺激に対して反応する大脳皮質の領域に違いがあるなどの報告もあり[15]、この領域に関しては今後詳細に検討してゆかなければならない課題であると考えられる.

図 4「耳に繃帯を巻いた自画像」(ヴァン・ゴッホ, 1889 年).
ゴーギャンとの共同生活がうまく行かず、ゴーギャンが部屋から出て行こうとした時、ゴッホはナイフで自分の耳を切り取り、二週間後その風貌を自画像として描いた[20].

それでは、この話のクライマックスである、亡霊による両耳の切り取りはどのように考えるべきであろうか. 筆者は精神科医ではないが、ヴァン・ゴッホが自分の耳を切り取ってその自画像を描いたという例があるように(**図 4**)、「耳なし芳一」の場合も世間もしくは庇護者の住職から注目を集めたいという潜在意識に由来する、芳一による自傷行為ではないかと考えている. いずれにせよ、芳一の奇怪な体験はその殆どが幻聴や錯聴に由来するものであることは、注目すべき点と考えられる.

むじな (Mujina)

「むじな(狢)」という話も「ろくろ首」同様、タイトルと内容との間に多少違和感を覚える話である. これに出てくる妖怪は、所謂「のっぺら坊」と呼ばれるもので、「むじな」という動物の名前で

図 5 葛飾北斎の描いた「むじな（狢）」.
この時代、北斎でも狸と狢をさほど区別しては描かなかった（「北斎漫画」[19]より）.

呼ぶのは何故かという疑問が生じる.「むじな」とは、正式には「狸」の近縁である日本アナグマ、あるいはハクビシンの事を指しているようであるが（**図 5**）、江戸時代にはこれらは（動物学的に）厳密に区別されていなかったようで、「狸」が化けて人を騙すように、「むじな」も狡猾に人を騙すものと考えられていた. 従ってこの時代には、「むじな」が「のっぺら坊」に化けて商人を驚かしたということは、特に説明しなくても良くわかったのであろう.

"O-jochu! -- O-jochu! -- O-jochu!. . . Listen to me, just for one little moment!. . . O-jochu! -- O-jochu!". . . Then that O-jochu turned around, and dropped her sleeve, and stroked her face with her hand; -- and the man saw that she had no eyes or nose or mouth,-- and he screamed and ran away.

（「お女中、お女中、お女中. 少しだけでも私の言うことを聞いて下さい. お女中、お女中. 」すると、その女中はこちらを振り返り、袖をおろし、手でその顔をなでた. その顔には目も、鼻も、口もなかった. 仰天した商人は叫び声を上げて逃げ出した. ）

"Not robbers, -- not robbers," gasped the terrified man. . . . "I saw . . . I saw a woman -- by the moat; -- and she showed me. . . Aa! I cannot tell you what she showed me!" . . .

"He! Was it anything like THIS that she showed you?" cried the soba-man, stroking his own face -- which therewith became like unto an Egg. . . . And, simultaneously, the light went out.

（「追いはぎじゃない、追いはぎじゃない. 」仰天した商人は喘ぎながら答えた.「俺は、俺は堀端で女を見たんだ. そいつは俺に顔を見せた. ああ、これ以上言えない. 」「へッ、そいつはこんな顔だったんじゃないかい. 」夜泣き蕎麦屋はそう言って自分の顔をなでた. 見ると、その顔は卵のようにつるりとしていた. . . . 同時に明かりが消えて、真っ暗になってしまった. ）

この話では、二度目に「のっぺら坊」を見た瞬間に周囲が真っ暗になってしまい、話が終わっている. 現在のような街灯や、明るい照明器具のない当時、日が暮れて月の出ない晩には、それこそ鼻をつままれてもわからないような闇夜になってしまう. そのような、視覚、聴覚などの感覚を遮断された状況の中を手許の薄暗い提灯の灯りだけをたよりに延々と歩き続けると、人によっては催眠様状態(trance-like state)におちいり、急に覚醒度が下がって瞬間的に睡眠状態になってしまったりする事がある[6)16)]. これは必ずしも肉体的疲労、睡眠不足や、ナルコレプシーのような睡眠過多とは関係しておらず、現代ではこのような現象は「ハイウェー催眠現象(highway hypnosis)」と呼ばれており、この状態の時にしばしば幻覚や恍惚感を体験することがあり、車の運転中に生じると重大な交通事故の原因にもなる大きな問題である[6)16)]. この状態の時に体験する幻覚は、日本では「タクシーに乗り込んでくる幽霊」[17)]、欧米では「消えるヒッチハイカー(vanishing hitchhiker)」[18)]という現象として知られており、一種の都市伝説として語り継がれることが多い[6)17)16)].

「むじな(Mujina)」に出てくる「商人」は、おそらく催眠状態に陥って意識レベルが低下して、「のっぺら坊」の幻覚を見ると同時に気を失ってしまったために、急に明かりが消えてしまったように感じたのだろうが、もしこの「商人」がその間痙攣発作を起こしていたとすれば、側頭葉てん

かんのような突発性の異常が起こったということも、可能性としては考えられるだろう.

お わ り に

以上、小泉八雲の「怪談」を題材として、神経内科学的な検討を行ってみた. 今回この作品を読み直し、また参考文献として当時の二次資料にあたってみて感じたことは、当時の日本人が不思議に思った現象あるいは体験を、不思議と思いつつ次々と語り継いでゆき、それを小泉八雲という作家がきちんと記録に残したことが、いかに大切なことであるかということである. このような(出来る範囲内での)正確な記録をとろうという姿勢は、別に小泉八雲が西洋人で、日本の文化に深く傾倒していたから可能であったと言うわけではなく、参考文献として挙げた「甲子夜話」の著者松浦静山などにも見られることが興味深い. 「怪談(Kwaidan)」は、たまたま小泉八雲が英文で広く発信したために世界的に有名になったが、昔の日本人の中にもこのような記録の精神が根付いていたことは、漢学の知識などをしっかりと身につけた当時の教養人の姿勢として、尊敬に値するものである.

現代人は「江戸時代」というと迷信がはびこり、近代科学的な検証などは困難であった時代と思いこむことが多い. しかし、実際の臨床の場でもそうであるが、説明不能な症状、徴候などを認めた場合には、将来解析可能になった時の資料として提供するため、出来るだけ正確な事実の記載を行うということがいかに重要であるかということは、当時も現在も変わりないであろう. そういう点から言えば、「怪談(Kwaidan)」には、不思議な現象の記録ということで、現代の科学者や臨床医の心構えに通じる点もあると言えよう.

稿を終えるにあたり、視覚障害者の体験する幻覚に関していろいろとお教えいただいた、久留米大学精神科 小路純夫先生、園田病院 精神科 諌山博之先生に深謝いたします. なお、本文中に引用した小泉八雲の原文は、全て熊本大学の「ラフカディオ・ハーン著書データベース (http://js.lib.kumamoto-u.ac.jp/~elib/khearn.html)」から引用させていただきました.

文 献

6) 中村希明. 怪談の科学. ブルーバックス. 東京: 講談社 ; 1988. p.14-133.
7) 古谷博和. エッセーに記載されている怪談話と神経内科疾患との関連. 神経内科. 2003; **58**: 419-22.
8) Cheyne JA, Newby-Clark IR, Rueffer SD. Relations among hypnagogic and hypnopompic experiences associated with sleep paralysis. *J Sleep Res*. 1999 ; **8(4)** : 313-7.
9) Cheyne JA, Rueffer SD, Newby-Clark IR. Hypnagogic and hypnopompic hallucinations during sleep paralysis: neurological and cultural construction of the night-mare. *Conscious Cogn*. 1999 ; **8(3)** : 319-37.
10) Diederich NJ, Goetz CG, Stebbins GT. Repeated visual hallucinations in Parkinson's disease as disturbed external/internal perceptions: focused review and a new integrative model. *Mov Disord* 2005 ; **20** : 130–40.
11) Terao T, Collinson S. Charles Bonnet syndrome and dementia. *Lancet* 2000 ; **355** : 2168.
12) 先天性視覚障害者と幻聴 (私信)
13) Rauschecker JP, Korte M. Auditory compensation for early blindness in cat cerebral cortex. *J Neurosci* 1993 ; **13(10)** : 4538-48.
14) Elbert T, Sterr A, Rockstroh B *et al*. Expansion of the tonotopic area in the auditory cortex of the blind. *J Neurosci* 2002 ; **22(22)** : 9941-4.
15) Stebbins GT, Goetz CG, Carrillo MC *et al*. Altered cortical visual processing in PD with hallucinations: An fMRI study. *Neurology* 2004 ; **63(8)** : 1409-16.
16) Sagberg F. Road accidents caused by drivers falling asleep. *Accid Anal Prev* 1999 ; **31** : 639-49.
17) 今野圓輔. 日本怪談集 幽霊篇. 現代教養文庫、東京:社会思想社; 1975. p. 232-55.

18) Brunvand JH. The vanishing hitchhiker. American urban legends and their meanings. W. W. Norton & Co., Inc., New York, 1981 〔大月隆寛、菅谷裕子、重信幸彦・訳. 消えるヒッチハイカー. 都市の想像力のアメリカ. 東京 : 新宿書房 ; 1988. p. 19-79.〕
19) 葛飾北斎. 北斎漫画 三. 永田生慈 監修. 東京 : 岩崎美術社 ; 1987. p. 92-220
20) Walther IF. *Vincent van Gogh*. West Germany: Benedikt Taschen Verlag GmbH & Co, Köln ; 1987. p. 58-9.

<Abstract>

Tales of "Kwaidan" by Lafcadio Hearn and neurological disorders

by
Hirokazu FURUYA, M.D., Ph.D.
from
Department of Neurology, Neuro-Muscular Centre, National Omuta Hospital, Fukuoka 837-0911, Japan

Lafcadio Hearan wrote many tales of the supernatural records based on the old Japanese folklore. 'Kwaidan' is his last, the most famous work originally published in 1904, in which there are several stories probably related to neurological disorders.

'Rokuro-Kubi' is the tale of monstrous creature, of which the head is floating in the air. However, in traditional folklore of Japan, 'Rokuro-Kubi' is the monster of which neck lengthen tremendously. The former may be some personal experience like the hypnagogic hallucination, and the latter may be related to the cenesthesic hallucination rarely experienced in the patient of classical migraine. 'Jiki-jin-ki' looks like the tale of hypnagogic hallucination and 'The Story of Mimi-Nashi-Hoichi' may be one of the auditory hallucination experienced with the patient of congenital blindness similar to Charles-Bonnet syndrome. 'Mujina' looks like the experience of 'highway hypnosis' or 'temporal lobe epilepsy'.

Each of tales contains much truth for the importance of observation and recording of the symptoms, which is unable to explain at that age.

* * *